

# 水、人、歴史の循環がはぐくんだわがまち 自然・文化・教育が循環する魅力的なまち

## 特徴的な環境にはぐくまれた 歴史と文化

富山県の東部・新川地域に位置する魚津市の市域は、新川平野のほぼ中央部、片貝川と早月川に挟まれた扇状地を中心に展開している。

魚津という地名は魚のよく獲れる津(港)、魚の産地というほどの意味とされるが、この地名が文献に登場するのは15世紀後半からだ。魚津の良漁場たる理由は北西部の市域が、湾内の水深が日本でも有数に深く、魚介の豊富なことで知られる富山湾に面しているからだ。その深さは1000mに達する。

一方で市域南東部は最高2415mの山岳部(北アルプスにもつながる毛勝山など)で構成されている。その景観の素晴らしさは、晴天の日なら1年中いつでも、湾岸部からも山頂部が鮮やかに一望できるほどだ。

山頂部と海底部との高低差は約3500mにも及ぶ。魚津市のこうした地形的特徴は、市の全域が、ダイナミックな地形で世界的に知られる『立山黒部ジオパーク』に含まれていることでも分かるだろう。

冬季になれば深く冠雪する重畳たる2000m級の山並みから平野部へ、さらに沿岸部へと、幾筋もの河川の流れおよび伏流水とともに、沃土がなだらかに傾斜しながら開けているのだ。

魚津という前述のような魚の本場のイメージが強いが、平野部の米や各種の野菜などに加え、海まで続く傾斜地ではブドウ、リンゴ、梨などの栽培も盛んだ。

海・山・川・平野がぎゅっとコンパクトに圧縮されたようなその地形は、富山湾沿岸全域の特徴でもあるが、とりわけ魚津市はその典型的な事例とされる。

そんな魚津の大自然がはぐくんだ《結晶》の一つといえるのが、ふるさと納税の返礼品

としても、市販品としても人気の高い《うおづのうまい水》である。

「《うおづのうまい水》は片貝川流域の地下水を加熱処理してペットボトルに詰めたものです。おかげさまで食品や飲料の国際的な品質コンクールとして知られる『2017年度モンドセレクション』においても、めったに出ない最高金賞を受賞しています。(2018年度においても連続で最高金賞を受賞)片貝川の清流ぶりは、越中・富山の国



むらつばき あきら  
村椿 晃  
魚津市長



ユネスコ無形文化遺産にも登録されているタテモン行事

司だった万葉歌人の大伴家持が、魚津を訪れた際に「片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなく、あり通ひ見む」という歌をつくった



日本海形成の秘密を秘めた埋没林に触れられる「魚津埋没林博物館」



ことでも有名です。特に市内全域の上水道が、今も良質な地下水で100%まかなわれている事実は、源流



部から河口にまで至る魚津の《水循環》が、太古からの健全性を保っていることを証明しているといえます」  
 そう語る村椿晃・魚津市長は、富山県庁の職員時代に地域振興課長や生活環境文化部長などを歴任した後、平成28年5月に魚津市長に就任。現在1期目であるが、魚津とは地続きで、歴史的に生活・文化圏を共有してきた黒部（黒部市）の出身であり、県職員時代のキャリアを通じて、魚津をはじめとする富山湾岸の伝統的な生活文化、特徴的な自然環境などを知悉してきた経緯がある。  
 「魚津の自然環境の特異性は、例えば魚津のシンボルでもある、日本有数の鮮やかさで観測される富山湾の蜃気楼の存在でも明らかです。また2000年も前の片貝川の土砂流出の影響で埋没した杉の原生林が、その後の

地殻変動等で海面下にそのまま保存されることになった《埋没林包蔵地(国の特別天然記念物)》が魚津港の沿岸部に広がっています。

そうした非常に特徴的な自然環境を背景に、あるいは基盤に、ユネスコの無形文化遺産に登録された《魚津のタテモン行事》や、夏の《せり込み蝶六(魚津市無形民俗文化財)》などの魅力的な文化資源が地域の人々によって創られ、維持・保存されてきました。

魚津ではそのように自然環境が人や文化をはぐくみ、人が自然環境を護ってきたという歴史があるのです(村椿市長)

### 総合産業としての観光振興と 《新観光都市》の実現

水が森をはぐくみ、森で培われた栄養を水が河口部に運ばれる過程で多様な生物を養い、地域の人々の生活を支えるとともに、海に達してからは再び蒸発し、雲となり、雨や雪となって山岳部や平野部に降り注ぐ。魚津の《水循環》は地域の人々の暮らしも含めて、古来、多様に循環してきたのだといえる。

こうした豊かな自然環境と人々の営みに培われてきた魚津の個性的な地域風土は、平成26年度に策定の「人口ビジョン」「創生総合戦略」を包含した「第4次総合計画(〜2020年度)の最重点事業である、「新観光都市うおづ・教育都市うおづ・子育て都市うおづ」の実現に向けた基盤ともいえる。



毎年春から初夏にかけて観測される魚津の蜃気楼

「中でも観光については、地域のあらゆる資源を活用して地域の魅力を掘り出し、新たな付加価値を創り出すという意味で、総合的な産業といえます。従いまして、観光振興を図ることは、地域の魅力を増やすことにつながりますし、人々の交流を増やすことは将来的な移住・定住にもつながる可能性があります。

魚津市では平成23年3月に富山県内では初となる観光振興条例を策定、あわせて『第一次観光振興計画』を策定し、観光振興に努力を積み重ねてきました。そして昨年3月には『第二次観光振興計画』を策定しました。

国では2020年東京オリンピック・パラ



国内最古の市立水族館「魚津水族館」

リンピック競技大会を機に外国人観光客の積極的な受け入れを打ち出しているわけですが、その背景には人口減少が進む環境下において、観光こそは国内の消費を拡大し、経済成長を推進する大きな柱だとの見極めがあるわけです。それは私たちのような地方都市でも同様です。

さらに大都市圏よりも早いペースで人口減少が進む地方都市においては、先ほど申しましたように、観光振興はいろいろな意味で総合的な効果を発揮するものと確信しております。折しも魚津市では一昨年12月に《魚津のタテモン行事》が、ユネスコの無形文化遺産



海からも市街地からも常に見える山並みは魚津ならではの景観

に登録されたばかりです。これを機会にぜひ、国内外からの観光客の皆さまの来訪を促進するような施策を、積極的に実践していきたいと考えております(村椿市長)

そこで魚津市が目指しているのが、豊富な地域資源を丸ごと体験してもらおうための、魚津ならではのプログラムの構築だ。その前段階として現在、次のような準備(課題解決)作業を多角的に推進している。

①「市民のおもてなし意識の向上、観光客の受け入れ基盤の拡充」↓ガイド育成、観光客



明治維新(1868年)の数か月前に完成したレトロな万灯台



大正7年、魚津で米騒動が勃発(舞台となった旧十二銀行倉庫)

口の一元化、にぎわい空間の創出、地域交通網等回遊性の向上、ほか。

②「観光資源・地域資源を生かした魅力向上および関係団体の連係強化」↓豊富な地域資源・観光資源のもつストーリーを整理・連係

化することで魅力を向上、魚津市の魅力体験・満喫できるプログラムの構築、ほか。

③「魚津の特産を生かした特産物のブランド化および魅力向上」↓農産物・海産物などの食資源・食文化のブランド化とニーズへの対応、ほか。

④「広域観光ネットワークの構築と連携強化・コンベンション開催支援の推進」↓黒部峡谷や立山黒部アルペンルートなどのさらなる活用と広域化の実現、ほか。

⑤「インバウンドの推進および広域プロモーションの推進・情報発信の充実」↓SNS等を活用した情報収集と発信、旅行会社へのプロモーションの推進、ほか。

### 循環する学びの仕組みが目指す 地域課題の解決

ここで市長の談話にあった《魚津のタテモン行事》と《せり込み蝶六》について、ご説明しておきたい。まずタテモン行事は、高さ15mもの大柱に90以上の提灯を、まるで帆のような形に飾り付けたものを「そり台」に立て、曳き回す勇壮な行事だ。また、せり込み蝶六は、扇子や笠、提灯などをもって「極楽蝶」が舞うように優雅に踊るところから名づけられたとされる。



日本で最も海に近いテーマパーク「ミラージュランド」



全国から大勢の人が来訪した「第68回全国植樹祭」(2017年5月)

「特にタテモン行事がユネスコの無形文化遺産に登録されたことと、全国植樹祭（平成29年）が開催されたことを契機に、海と山をつなぐ文化を改めて育て、森と海に恵まれた豊かな環境を継承していく市民意識の醸成を図るため、タテモンの大柱の材料になる杉やケヤキを植樹していきたいと考えています。同時にタテモンを製作する技術や運営する担い手を育成していきたい。併せてタテモンのユネスコ登録をPRするため、積極的な情報発信をしていきたいと考えています」（村椿市長）

伝統文化を継承することがそのまま魚津市

の地理的・地形的バックグラウンドである「高低差3500mのまち魚津」「水循環のまち魚津」を継承することになるのだ。この魚津市の地形的な在り方には、前述したように、その環境下で生活を営み、文化を築いてきた「地域の人々」の「営々と続いてきた暮らしの循環」も含まれる。

「新観光都市うおづ」とともに重点事業と位置付けられている「教育都市うおづ」の取り組みは多岐にわたるが、魚津市が取り組んでいる《魚津三太郎塾》こそは、「循環する人材育成」を目指した、いかにも魚津らしさの横溢した事業といえる。

「魚津三太郎」というのは、テレビ発明の先駆者とされる川原田政太郎博士（早稲田大学名誉教授）、病害虫に強い稲の研究者・盛永俊太郎博士（九州大学名誉教授）、アンテナ・超短波の研究者でありテレビアンテナを実用化した宇田新太郎博士を指します。

明治・大正・昭和の3代にわたって各界で

活躍された、いずれも魚津出身の偉人の方たちですが、魚津市ではこの3人の大先達の存在をシンボルに、富山大学との連携によって、自ら考え行動する人材育成を目標とするプロジェクトを、平成23年度から実施しています」（村椿市長）

大学の教員や民間企業の先駆者などを講師に招き、ディスカッション中心のプログラムを推進することによって、地域活性化及び地域経済のリーダーを育成しようとする試みだ。同プロジェクトは産業競争力強化法に基づく「特定創業支援事業」でもあるため、塾生は終了後に同法に基づくさまざまな支援が受けられる。また同プロジェクトからの派生事業として、昨年「うおづビジネスプランコンテスト」も開始されている。

同事業は「魚津三太郎ネクスト創業推進事業」と位置付けられ、人口減少や高齢化などの地域課題の解決を目指す、ビジネスプランの原石を発掘することを目的にしている。

地域で学び、地域課題の解決にも資するようなビジネスを創造する――。こうした教育・学習システムこそはまさに、地域循環を体現する「新たな学びのカタチ」といえるのではないだろうか。

## 究極の《循環》を目指す 安全・安心な周産期医療の構築

「新観光都市うおづ」「教育都市うおづ」と並

# 魚津市

市 政 ル ポ

(富山県)

ぶ重点事業、子育て支援を推進する「子育て都市うおづ」の取り組みも多彩に実施されているが、中でも注目されるのは、平成28年度から始まった「産婦人科クリニック構想」への取り組みである。

「魚津市では平成17年頃まで、年間400人前後の出生がありました。しかし、18年以降は少しずつ減少し、構想を策定する前の平成28年には出生は252人にまで減少しました。出生数の減少や、市民の間からは、やはり地元で出産したいという声が多く、そのための医療体制の構築を目指しました」(村椿市長)

魚津市で産婦人科医の招致とともに、市内唯一の中核的病院である富山労災病院に分娩のできる施設を整えるべく、現在、準備を進めている。

「労災病院で扱うのは正常分娩を中心として、高度医療が必要な場合には、黒部市民病院などに受け入れていただくよう、連携をお願いしております。同時に産前・産後のケア施設を富山労災病院の隣に設置する予定です」(村椿市長)

母子の安全を最優先とする安全・安心な医療の提供、女性の健康や母子保健の向上、富山県や周辺自治体との連携による周産期医療体制の構築を目指して、さまざまに調整を図っているところである。ところで今回の取材は3月16日(金)に実施させていただいた。その前日および翌日は初夏を思わせる陽気と

なったが、「あわよくば」と期待していた蜃気楼を目にすることはできなかった。その後、魚津市の蜃気楼観測サイト(しんきろう通信)を調べてみると今年の蜃気楼は3月27日が最初の観測となった模様だ。

蜃気楼への期待は、まさに陽炎のごとき結果に終わってしまったわけだが、魚津市における人口減少や高齢化など、地域課題の解決に向けた取り組みは、これまで述べてきたように、少しずつではあるが、地道に確かに進められつつあることが実感された。

また魚津市への取材の前後に訪れた、魚津の産直食堂兼アンテナショップ「うおづや」

(東京都板橋区中板橋)の様子も印象的だっ



大いに盛り上がった「第10回Sea級グルメin魚津」(2017年10月)

た。店内には魚津のポスターやグッズが展示され、夜ともなれば常に満席に近い店内では、魚津の味に舌鼓を打つ人々が幸福そうな表情を浮かべている。同店には機会あるごとに魚津市観光協会の職員などが駆け付け、イベントを開催している。「うおづや」が立地する中板橋商店街の方に話を聞いてみても、中板橋地域では現在、魚津のネームバリューがぐんぐん伸びているという。魚津を離れた東京の一角で日夜繰り返し返されている、こうした地道な交流もまた、魚津という土地の持つ《循環するココロ》の一環、といえるのではないだろうか。

(取材・文：遠藤隆／取材日平成30年3月16日)



平成28年に誕生した魚津市のアンテナショップ&産直食堂「うおづや」(東京都板橋区)